

翻訳という〈魔法〉 を考える

京都大学人間・環境学研究科／The Baker Street Bakery
大久保友博／大久保ゆう

目次

- ◇ 1 翻訳者は魔法使い…………… 1
- ◇ 2 とりあえずその場所には何があるのか…………… 2
- ◇ 3 言語を割り当てるとのこと…………… 3
- ◇ 4 翻訳の始まる瞬間…………… 5
- ◇ 5 いったい誰に通じないのか…………… 7
- ◇ 6 言葉を作ることと理解すること…………… 9
- ◇ 7 翻訳と理解はほとんど同じ…………… 1 1
- ◇ 8 ここまでのまとめ：翻訳とは何か…………… 1 2
- ◇ 9 翻訳空間について…………… 1 4
- ◇ 10 直訳と意識を脱構築！…………… 1 8
- ◇ 11 いろんなテキストと翻訳者の位置関係…………… 2 1
- ◇ 12 翻訳Q & A：誤解だらけの翻訳（研究）…………… 2 3

このパンフレットは、京都大学総合人間学部提出された卒業論文「翻訳研究序論——空白の強度と翻訳者の現象学」（A 4で318枚）から引用や証明を落とし、個々の論文もカットし、第一部の理論編だけを要約したものになっています。元の論文はこんなゆるい文章ではありません。とてもまじめに書いてあります。ご注意ください。

◇ 1 翻訳者は魔法使い

「わたし、翻訳をやってます。」

と人に言うと、たいへいの人はこちらを答えます。

「へえー、すごいですね。」

そしてその人は、たいがい不思議な目をしてこちらを見えています。何がどうすごいというわけでもなく、詳しくはよくわからないけれど、「すごい」というイメージだけがその人の頭の中で渦巻いていることでしょう。

たとえば、このように返ってくることもあるかもしれません。

「じゃあ、英語がぺらぺらなんですね！」

すると翻訳者は首をかしげます。別に英語が自由自在にしゃべれるわけではなし、かといって、その違和感を相手にどう伝えていいかもわかりません。

いえ、そうじゃないんですよ、と言っても、どう違うんですか、と聞き返され、外国語を日本語にするんであって別に英語云々ではなく……と言うと、

「じゃあ、日本語がお上手なんですね！」

と返され、翻訳者はまたそれにも違和感を感じてしまいます。けれども、ちゃんと返す言葉もないので、「ええまあ」とお茶を濁して別の話に変えてしまいます。

この簡単なエピソードの根底には、まず一般人も翻訳者も、翻訳とは何？という問いに答えられないという事実があります。外国語を日本語にすると行って済むならば話は簡単なのですが、実のところ外国語と日本語が抜群にできるのに翻訳はからっきしダメという人もいるわけで、どうもそういうことでは片づけられません。

しかし、わからないながらも現実には翻訳がたくさんあふれていて、多くの人が翻訳にたずさわっていますし、翻訳を教える学校なんていうものもあります。にもかかわらず、翻訳とはいったい何なのか、いまだによくわかっていません。

それに普段「翻訳って何？」ということを考えることはありません。そこに本があって、翻訳者がいて、なんだかよくわからないけど翻訳をすれば、翻訳書が出来上がっています。人はそれを「すごい」の一言で認識しています。

それは言ってみれば、〈魔法〉のようなものです。その原理や内容はよくわからないのだけれど、その翻訳という魔法を使える人が

いて、一生懸命呪文を唱えて本にその翻訳という魔法をかけると、なんと翻訳書が出来上がっちゃいました！というようなイメージがそこにあります。その魔法は普通、修行をしないと身に付かなくて、人は原理もわからないまませっせとその魔法の習得に励みます。そしてその魔法の実践は、人々に「すごい」ものとして受け入れられます。

このように中身のまったくわからないブラックボックスを抱えた翻訳は、佐藤良明さんが言うように、一種の〈魔法〉であるわけです。本があって、翻訳者がいて、何かが起こる。そうすると翻訳がそこに現れる。じゃじゃーん。

もちろん翻訳とは何かという問いがこれまで行われてこなかったわけではありません。研究として1970年代頃から海外で行われてきましたが、日本人翻訳者はその研究を見て、大きく首を振ります。その首振りとは、こんなふうに言っているみたいです。

「違う違う、翻訳はこんなじゃない。翻訳はもっと魔法みたいなものなんだ。」

お師匠さんたちはそう言い張るのですが、いかんせんお師匠さんたちは魔法を使うのにせいいっぱいで、魔法のことを考える余裕がありません。そこで魔法使い見習いでもあるぼくは、暇に飽かせて魔法の研究をすることにしましたのです。

◇ 2 とりあえずその場所には何があるのか

翻訳については色々な言説があるにはあるのですが、それをいったん忘れてしましましょう。何かしらの偏見でもって翻訳をながめるのはやめて、わかることから考え始めるのが、いちばんいいことだと思います。

では、翻訳という場所には、いったい何があるのでしょうか。

ややこしいことは全部忘れて、それだけ考えることにしましょう。

ええと、まず本があります。そして人間がいます。ここで三ヶ月くらい時間を進めると、隣にもうひとつ本が現れます。以上。

あまりにも簡単すぎますが、はじまりは得てしてこのようなものです。それでは、もう少しつきつめて考えてみましょう。

翻訳とは〈本〉を訳すことに間違いはないのですが、〈本〉とは

何でしょうか？ 何よりもまず、それは〈モノ〉です。物質です。原子やら分子やらのかたまりです。

別に紙に限る必要はありません。何かしらのモノがあって、たいいの場合、その表面に何らかの模様があります。小さな模様がモノの表面に整然と並んで、たくさん集まっています。模様の地となるのは石の板であったり、砂浜であったり、紙であったり、コンピュータの画面であったりします。その表面がたくさん集まって〈束〉のようなものになることもよくあります。

あわてん坊の人は、本とは紙に文字が書いてあるもの、と言うかもしれません。でも、なぜそれが文字だとわかるのでしょうか？ 単純にそれをモノと考えるのであれば、何かモノの表面に、それが白い表面なら、そこに黒い線形の模様があるだけです。あるいは平らな表面に溝で作られた模様がある、ということもあるでしょう。紙であれば、その上にインクというものがくっつけられているだけです。

もし人間を外側からだけ見るのであれば、そういう〈本〉というモノがあって、人間が頭を抱えながら手を動かして、横にもうひとつ〈本〉を作っている、そういうふうにはしか見ることができないでしょう。

そこから一步進むためには、人間の中へ入り込まなければなりません。

◇ 3 言語を割り当てるとのこと

実のところ本は単なる〈モノ〉です。けれども人間の中ではそうではありません。あるひとつの本に対して、人は「これは日本語で書かれた本だ」とか、「フランス語で書かれた本だ」とか、「アメリカ語で書かれた本だ」とか言います。つまり、そこには単に地の上に何らかの図があるだけのものを、何らかの言語に当てはまるものとして見ている、ということです。

〈本〉を見て人間が最初にするのは、そこにある〈図〉がどんな記号体系に属しているのか、それを認識して、その本に向かって当てはめることです。自分の知っている記号体系の中から、目の前のモノに当てはまるものを探して、その記号体系を図に割り当てる、ということでもあります。

もしそこに「こんにちは」という文字列があって、その模様のか

たまりと自分の認識のなかで一致するものがあれば、人はそれを「日本語で書かれた文章」と呼ぶことでしょ

う。もし文字列が「Thank you」であれば、それを「英語で書かれた文章」と呼ぶこともあるでしょう。

もし「Guten Tag」とあれば、それを「ドイツ語で書かれた文章」と見なすこともあるかもしれません。

それは図を見て、〈何とか語〉という記号体系をその図に割り当てているのです。そして、ここでひとつひとつ〈でしょう〉や〈かもしれません〉と慎重に記述しているのは、それがわからない場合や、違ったものを当てはめる場合もあるからです。

たとえば、「謝々」という文字列があっても、頭のなかにその知識がなければ、その言葉が何であるか、認識することはできません。

また、「Bonjour」とあるものを、「これはスペイン語だ」と考える人もいるかもしれません。

あるいは「Good morning」を含んだ文字列でも、ある人は「英語」と言い、また別の人は「17世紀の英語」だと言うかもしれません。「こんにちは」を含む文字列を、「関西弁」だという人と、「東北弁」だという人、ふたり現れても不思議ではありません。「Thank you」にしろ、それを「英語」という人もあれば、「日本語」だという人もあるでしょう。またはある言葉を、「日本語」という人、「医学的な日本語」という人もあるでしょう。ここでは、どちらも正しいかもしれないが、どちらの方がより正しい、という可能性が存在します。

ほかにも「柿本人麻呂の句は実は日本語じゃなくて朝鮮語なのだ」であるとか、「ヘブライ語の聖書は実は隠された暗号で書かれた本なのだ」であるとか、そういうことを言う人もあるでしょう。そういう可能性があらかじめ否定されているわけではありません。

ここで大事なことは、本が単なる〈モノ〉である以上、「それが何語で書かれているのか」という事項は、それを見る人間の認識の問題であって、本とある記号体系が、人間を超越したところでくっついているのではない、ということです。可能性だけで考えれば、人はある〈本〉を〈何語〉であるとも言い得ますし、それが正しいか間違っているかを決めるのは、絶対的な基準ではなく、相対的な基準に過ぎないということです。

◇ 4 翻訳の始まる瞬間

さて、ここで〈何とか語〉と呼びうる事態についても考えておく必要があるでしょう。とりあえず何でもいいのですが、たとえば〈日本語〉という定義があるとして、それではいったい〈日本語〉とは何なのでしょう？

つまり、絶対普遍の〈日本語〉が存在しうるのか、ということです。たとえば道ばたに〈日本語〉が落ちていて、それを食べたり身につけたりすれば日本語が身に付くのでしょうか。もしくは、おぎゃあと生まれたあと、母親から絶対普遍の〈日本語〉を分けてもらい、そうして赤ん坊はみんなと同じ〈日本語〉を手に入れるのでしょうか。

〈何とか語〉ということを考えてとき、何よりも忘れてはならないのは、人はそれぞれ自分の〈言語〉というものを持っているが、たったひとつ絶対普遍の〈何とか語〉を持っているわけではない、ということです。その自分の言語は他人のものと似通っているかもしれませんが、おそらく少し違います。複数の人間がいれば、同じような言語を持っているように見えても、本当は少しずつ違います。経験も違えば環境も違うし、人生そのものも違う。成長するに従って構築される個人の〈言語〉は違って当然です。

それでも〈何とか語〉というものを考えることができるのは、それぞれの人の持つ自分の〈言語〉が似通っていて、それをひとくくりにできそうに見えるからです。あるいは、お互いが似通っている言語を持っているために違っているということを意識しないのであれば、それゆえにある一定の集団は「自分たちは（同じ）〈何とか語〉をしゃべっている」と思いこむこともできるでしょう。さらに言えば、それが進むと〈何とか語〉の意識すら消え、ただお互いにわかる言葉をしゃべっているという無意識のままに生きることにもできるに違いありません。

けれども、その〈何とか語〉という定義は非常に脆弱なものです。たとえば〈日本語〉を考えても、「現存在」という言葉はわかる人とわからない人にわかれるでしょう。「現存在」は辞書に載った〈日本語〉ではありますが、〈哲学の日本語〉であり、〈哲学の日本語〉のなかでは通じることもあるでしょうが、〈日本語〉のなかでは理解が絶対的に保障された言葉ではありません。どのくくりで抽象化しようとも根本的には自由であり、〈「現存在」の通じる日本語〉

と〈「現存在」の通じない日本語〉にわけてもいいわけで、また〈日本語〉のなかにも〈関西弁〉や〈標準語〉あるいは〈若者言葉〉、〈技術屋言葉〉など、抽象化できるくくりはいくらでもあります。それでもなお〈日本語〉がほかの言葉よりも優先した定義に見えるのは、国家が存在してそれを教え、習得させようとしているためです。

ある人間のなかで構築された言語世界と、もうひとりの人間のなかで構築された言語世界がある程度交換可能である限り、人は話すことができ、理解することができます。そしてその前提の上に言語は〈何とか語〉として抽象化されます。たとえば、「りんご」という言葉がお互いにわかり、その言葉で会話ができるのは、その「りんご」という言葉がお互いのなかで、まったく同じではないにしても共通したイメージを作っているからです。もっと複雑な表現でも、それによって構築されている世界が似通っていれば、いくぶん相手に伝わることもあるでしょうし、もしわからなければ、自分の言葉をもう一度語ることが必要となるでしょう。

……もしわからなければ……

目の前にある〈本〉に戻りましょう。そこに本があって、人はその本にある抽象化された記号体系を割り当てます。もしその記号体系が自分にとってわかる（と認識する）ものであれば、人はそのままその本を読むことでしょう。しかし、ある抽象化された記号体系があるということは、そこに所属する人々がいるということです。ある記号体系と、それを理解することのできる人々。理解できる人があるということは、その一方で捨象された〈理解できない人々〉もいることを意味します。けれども、自分が読める場合、普段それを意識することはありません。ひょっとすると、最初に割り当てた〈記号体系〉ですら意識しないままのこともあるでしょう。

ただ、そのことに気づくこともあるわけですが。ある〈本〉が存在し、人はその本の帰属する言語体系を割り当てるが、その言語のわからない人（々）がいる、ということに。比喩的に言ってよければ、あるものとあるものが通じていない、というふうに気づくのです。何らかの〈通じがたいもの〉をそこに発見するのです。意識しなかった〈記号体系〉と別の何かとのあいだの差異の可能性をそこで初めて意識したり、〈記号体系〉そのものの閉鎖性を初めて意識したり、そういうこともそこでは起こるはずですが。

もちろん、本が単なるモノである以上、すべては人の頭のなかでの出来事です。

にもかかわらず、人がある本に対して、ある言語体系を割り当て、そしてそのことによって何か〈通行不可能な状況〉を見いだすことがあるわけです。そしてその〈通じがたいもの〉を見つけ、人がそれを〈通じさせたい〉と思ったとき、翻訳が始まります。その〈通じさせたい〉という欲望こそが翻訳の始まる瞬間なのです。

◇5 いったい誰に通じないのか

では〈通じない〉ということを発見したにせよ、その〈通じない〉相手というのはいったいどこの誰なのでしょう。〈通じない〉という以上、ふたつのものがあって、その間が通じていないということなので、対象がふたつ必要になります。

その一方のものは、間違いなく目の前にある〈本〉の方へ向かいます。そうするともう一方のものは、その〈本〉がわからないと思われる〈誰か〉になるでしょう。しかしその〈誰か〉は誰でもいいわけではありません。

たとえば、目の前の本を〈日本語〉だということにしても、その〈日本語〉をわからないと考えられる人のなかには、アメリカ人もいれば韓国人もいて、ギニアの人もデンマークの人もブラジルの人にもそこに含まれる可能性があります。誰でもいいから〈誰か〉としてみたら、その〈通じない〉ことはどのようにして解消すればいいのでしょうか？

そうしてみると、その通じさせるゴールの部分をはっきり決めることが重要であることがわかってきます。その〈通じない〉相手というのはいったいどこの誰で、どのような人々なのか？

それは様々な可能性があります。元の〈本〉を〈英語〉としてみたのなら、その英語がわからない人としての〈日本語〉使用者を考えることができます。しかし、それ以外にも元の〈本〉を〈学術的日本語〉としてみたのなら、その日本語がわからない人としての〈日常的日本語〉使用者を考えることもできます。あるいは、元の〈本〉を〈英語〉として、その英語がわからない人としての〈日本語〉使用者の〈自分〉を考えることもできましょうし、元の〈本〉を〈日本語〉として、その日本語がわからない人としての〈日本語〉使用者の〈自分〉すら可能であるのです。

とにもかくにも、欲望としては〈通じさせたい〉ということがあるので、目標のところにいる人なり、設定した言語なりをちゃんとどれかひとつに決めなければ、どうしていいかわからなくなります。アメリカ人に向かえばいいのか、ブラジルの人に向かえばいいのか、それをはっきりしなくてはなりません。

〈誰か〉といったとき、その可能性は無限にあります。それだけに、まずどの〈誰か〉なのかということ、ひとつに決めることが必要です。そして、その範囲内でしっかり理解されるようなものを作れば、翻訳が成功する可能性があるわけです。〈通じさせたい〉のだから、通じなかったらそれはやはり失敗ということになります。

しかし、言葉というものにはいろいろあります。無限の可能性があります。考えてみれば、〈日本語〉と〈英語〉がごっちゃになったような言語だって、仮想的にはあり得るでしょうし、潜在的にはどんな混合可能性だって、あるいはどんな新しい言語だってあり得るのです。ただ問題なのは、その言語に所属し、それを使用でき、理解できる人間がいるかどうかということです。新しい言語を作っても、そのわかる人がいなければ意味がないし、それゆえにその言葉は相対的に価値がないということになります。

そうすると、もし〈英語〉から誰でもわかる〈日本語〉に翻訳したいとき、その真ん中にありそうな英語なんだか日本語なんだかわからないような言葉を作り出して翻訳してしまっても、誰も読む人がいないので、相対的には意味がないことになります。

そういう意味のないことをしないために、人は何をしなければならないかということ、その真ん中にありそうなんだかよくわからないものを意識の外に追い出してしまうことです。その真ん中のんだかよくわからないものの可能性を消してしまわなければなりません。そんな真ん中のものを作らないように、そこに迷い込まないよう意識しなければならないというわけです。

つまり、〈本〉をある記号体系に割り当てて、さらにそのわからない人々の所属する記号体系を想定するだけではなく、そのあいだのさまざまな可能性を余計なものとして消してしまわなければならないということです。

それは、〈本〉の第一の記号体系と、わからない人々の第二の記号体系が、まったく違うものであると強く意識することでもあります。いくらわからないだろうといっても、ちょっとくらいはわかるだろう、とか思っていると、やっぱりわからないものを作ってしまうことになりかねません。

うまく目標に何かを投げ込むためには、途中で落ちないように気をつけなければなりません。第一の記号体系と第二の記号体系のあいだには禁止された領域があり、それをきっちり外して、うまく第一から第二へ投げ入れることが必要であるのです。

◇ 6 言葉を作ることと理解すること

こうして枠組みはこれでよいとして、では実際、翻訳するときにはいったい何をするのか、ということも考えなければなりません。ここまで棚上げしてきたことは、言葉を作ることとは何なのか、理解するというのは何なのか、ということです。

よく言葉とは意味を表現し、理解とはその意味を受け取ることだ、というふうに言われますが、では〈意味〉とはいったい何なのでしょう。

〈本〉はモノですが、〈意味〉はモノではありません。意味なんという実体が物理的な世界に存在しているわけではなく、意味は道ばたに落ちこちてもいなければ、しゃべると同時に口から飛ばして相手の頭のなかに飛び込ませるというようなものでもありません。

それはモノでない以上、最初から最後まで人の頭のなかにしかありません。しかも、ある人が言葉を作って、それと同時に作り出した意味というものは、その言葉を作った本人の頭のなかにしかないものなのです。

それでも、その本人には意味を作りたいという気持ちがあって、それを何とか伝えたくてたまらないのです。それで、自分の外の世界に向かって、ある一定の法則に従って、声を出したり、字を書いたり、何かしたりします。意味を伝えようと考えたその瞬間、それに見合った身振りを起こすわけです。その瞬間、意味を伝えようとした本人のなかに、意味が生まれてきます。そしてその本人のいる世界とのあいだで、意味と身振りがその瞬間だけ関連づけられます。

つまり、自分の前には自分の意識が飛び出ていくことのできない世界があるわけです。身もフタもないことを言えば、それはどうしようもない世界です。それぞれの人の意識は、絶対に永遠に切り離されていて、誰もその意識を共有したりすることはできません。意識と意識が解け合って一緒になることはありません。でも、そんな世界へ向かって何か身体を使って意味を表そうとする、とりあえず伝えたいんだ、という身振りを世界に向かって示す、そのとき、

自分と世界とのあいだでは物質的なものは何も生まれないのだけれど、その自分と世界との関係のあいだには一瞬だけ意味が生まれるのです。

どうしようもない世界のなかで意味を表そうとして何か行動を起こした一瞬の自分、というものは、意味が空気中を飛んでいかにせよ、何もしない自分よりかは何らかのものではあるわけです。少なくともじっと突っ立って黙っているよりかは何か違うものがそこにはあります。

その何もしないよりかはちょっと違う何かを、人は見たり聞いたり感じたりすることができるわけです。意味は空気中を飛んでは行かないけれど、こうして見たり聞いたり感じたりすることができる、というところが大事です。

なぜなら、声であれ字であれ何であれ、そういった身振りにはある一定の規則のようなものがあるからです。その身振りは絶対的な規則ではないものの、その人よりも前に大勢の人々が、あることを表すためにはこのような身振りをやってきた、という歴史があります。そしてその歴史のためにこれからもずっと自分も含めそれ以外の人も使っていくだろうし、そういった過去と未来を考えることができるがゆえに、その身振りは規範とされているのです。注意しなくてはならないのは、そういう声とか字とか何かは、毎回まったく同じ意味を表そうとしてきたのでもないけれども、その身振りを使う人の一瞬にはある一定の共通性があり、そしてその身振りを使うときはやっぱり別の身振りをを使うときとは違う、ということです。それゆえ歴史化や規範化といった抽象化が可能だったことも考えた上で、そういった身振りの集合というものは、ひとつの〈記号体系〉ということができるでしょう。そういった〈記号体系〉を見本にしながら、人は意味を伝えようとする身振りを行います。

さて、ある人がそういった身振りを起こしても、意味は空気中を飛んでいきませんが、別の人にはそれを感じることができます。常に身振りというものは意味を作ろうとして失敗した痕跡として現れます。相手に何かを伝えようとしても、意味がモノとして生まれることはなく、ただ動く身体が意味を作ろうとした残りとして、世界のなかに提示されるのです。そして意味は受け取れませんが、相手はその痕跡をとらえて、自分の頭のなかで同じような身振りを繰り返すことはできます。自分の意識のなかでもう一度、相手の身振りを見て、自分の〈記号体系〉に照らし合わせて、小さいながらも同じように意味を作ろうとするわけです。そこでもし、お互いの持つて

いる〈記号体系〉がある程度似通っていて、その身振りと意味の関係や世界などが共通していると、身振りの再生に成功して、意味が通じるということになります。自分のなかで、相手が世界とかかわろうとして作り出した何かを、再び自分のなかで同じように世界と関係づけようとする、それがうまくいくと、同じではないにせよ、似たような意味を自分のなかで生み出すことができるというわけです。

人が〈何か〉を伝えようとして〈あること〉をして、もう一人がその〈あること〉の痕跡をとらえて自分の中でその〈あること〉を再生する、そうして元の〈何か〉が一瞬わかったような気になる、それが理解だと言えるでしょう。

◇ 7 翻訳と理解はほとんど同じ

再び目の前にある〈本〉に戻りましょう。

この〈本〉——テキスト——は、おそらくどこかの誰かが作ったものだと思えることができるでしょう。どこかの誰かが、世界と関係しようとして作り出した身振りの痕跡です。誰かが世界に向かって意味を作ろうとしたが、成功したと思えるのは一瞬だけで、そのあとに残った燃えかすです。燃えかすであるからには、もはや残り物としてそこにあるだけで、その存在した瞬間からすでにこの痕跡を作った本人とも、その本人を囲む状況とも環境ともつながりは失われています。

さきほど、理解というものは自分の頭のなかで行うものだというふうに説明しました。理解と翻訳というものは実に似ています。しかし、いったいどこが違うのかというと、一般に〈翻訳〉と言われる行為は、その理解をもう一度身振りとして表に出すのだ、という点です。すでに何もかもが失われてしまった痕跡をとらえて、再びよみがえらせようとするのです。痕跡からできるだけその身振りの状況を推測して、同じ身振りをもう一度行おうというわけです。

誰かと世界との関係を、自分と世界とのあいだで再び関連づけようとする、といってもいいでしょう。誰かの生きた世界だとか、人生だとか、現実だとかを、自分のなかで再現し、痕跡を生んだ身振りと同じような形で、しかしながら別の〈記号体系〉によって、もう一度、外の世界に向かって結びつけることです。

翻訳は常に失敗に運命づけられています。それは表現という身振

りが永遠に成功しないこと、そして理解という身振りがあらかじめ不可能であることと同じです。

しかしそれでも表現と理解が価値のある行為であると同様に、翻訳という行為もまた、価値のあるものなのでしょう。

◇ 8 ここまでのまとめ：翻訳とは何か

さて、ここで考察を終えて、人間のなかから外へ戻ってきましょう。そしてここまででわかったことを、まとめてみましょう。

翻訳とはいったい何なのか、それは整理すると、次のようになるかと思われます。

- ・ 翻訳者と起点テキストが存在する。
- ・ 翻訳者は、起点テキストが所属していると思われる記号体系を任意に指定する。
- ・ その記号体系のなかに起点テキストを位置づけ、場合によっては表現体をも読み込む。
- ・ ひるがえって、翻訳者が目標テキストを作ろうとする目標言語を任意に指定し、場合によっては表現体をも設定する。
- ・ 起点言語と目標言語を異なるものと見なし、お互いのあいだにある中間的なものを消去し、翻訳空間を作り上げる。
- ・ 起点テキストという痕跡から元の身振りを再生し、目標言語の表現体へ向かって、再度同じように目標テキストを生成する。

あるひとつの言語というのは、その範囲や構造、語彙や用法、はたまた文法が自明のものとして存在しているわけではありません。各話者によってその内容や運用の仕方は異なっていますし、またあるひとつのテキストに何か絶対的な言語の定義が結びついているというわけでもありません。テキストは常にただのモノに過ぎず、それを解釈するのは人間であるからです。

そのため、翻訳者というのは、元のテキスト（起点テキスト）を見る際、常に〈言語〉というものをかりそめに抽象化して、そのテキストに対して割り当てなければなりません。これを〈起点言語〉というふうに呼びます。そして翻訳をするからには、その向こう側というものもあるわけで、その起点テキストが通じていないと思われる言語を、テキストの書き出される場所として、〈目標言語〉と

して設定しなければなりません。

その上で、たとえば、起点テキストはその起点言語のなかではどのような位置づけでどのような立場の文章であるのか、どのような人間が書きどのような技法を使っているのか、ということを考える必要もあるでしょう。そういった人間や政治的立場、技法などへの読み込みを〈表現体〉と呼ぶことにしますが、そういった〈表現体〉を場合によっては起点テキストに読み込んだり、あるいは目標言語のなかへ、目標テキストが書き出される場所として設定したりすることもあるでしょう。

これらのことを、ひとまず〈言語措定〉と表現することにします。

そして同時に、「翻訳」をする以上、翻訳対象であるテキストの言語と、訳出しようとするテキストの言語は「異なる」ものでなければなりません。つまり、言語と言語のあいだの「差異」を意識しなければならず、それぞれがまったく別のものと意識するからには、措定する言語と言語の中間地点があってはなりません。そのふたつの言語が混じり合ったりしてはならないわけです。

つまり、目標言語の方へ訳出しようとするにもかかわらず、その過程の途中で、起点言語と目標言語の中間言語のようなものに訳されてしまった場合は、起点から目標への交通が失敗するので、翻訳という行為が成立しえません。そこで、そういう訳出されては困る言語の中間地点のようなものを、意識的に消去する行為が必要となります。翻訳者はその言語の中間地点の可能性を一時的になかったことにして、起点言語と目標言語をきっぱりと切り分ける、完全に別のものと意識してしまうという行為をするのです。そこはテキストが入ってはいけない領域であり、ただ空白で何も無い、ゼロの空間なのです。言葉と言葉の混合可能性を消す、ふたつの言葉が同じものかもしれないという潜在性をなくしてしまう、つまり言語間に一種の〈間白（まはく）〉を入れることによって、言語をお互いに異なるものとして切り離すというわけです。

この間白のことを、野村喜和夫さんにならって、〈翻訳空間〉と呼ぶことにします。これは言語措定によって決められた余白であり、言語措定を裏返すとこの〈翻訳空間〉が見えてくるわけですが、逆に〈翻訳空間〉が言語措定を厳密に規定し、強化するという作用もあります。

ただふたつのテキストに漫然と言語を割り当てるだけでなく、それぞれを抽出して、残りのものをすべて捨象してしまう、そういう構造が〈言語措定〉と〈翻訳空間〉によって、表象されるといっ

ていいでしょう。

そしてその枠組みのなかで、本来他者によって作られた異なるものであるはずのテキストを自分の中に取り込み、原著者と同じ身振りでもう一度テキストを生み出すというのが翻訳者の行為であるといえます。不可解な異物や他者に対して自分を出来る限り近づけ、目の前にある言葉や声などの痕跡が作られた瞬間に立ち戻って、起点テキストの言葉などを別の記号体系のものとして自分の身体から再び生み出すということでもあるでしょう。

テキストは単なるモノに過ぎません。起点テキストは誰かが世界に向かって何かを表現しようとした痕跡です。おそらく生まれたその瞬間には、その作った人物は世界と自分とを声や言葉などによって結びつけようとしたはずですが、テキストという痕跡はその行為が終わった後の、残り物としてしか現れません。翻訳者はその表現の跡から、その生まれ出た一瞬をとらえようとし、その一瞬と同じような形で、起点テキストの言語とは違う目標言語でもって、再び世界とのあいだに関係を作ろうとするのです。想像しうる作者とある世界との関係を、もう一度自分と別の世界とのあいだで生き直そうとするとも言えます。

そういう考えで見れば、起点テキストと目標テキストは違っていても当たり前ですし、目標テキストに翻訳者が入り込んで当然とも言えるでしょう。また、それでもなお起点テキストと目標テキストがあたかも同じモノかのように見えることだってあるはずです。

こうしたこの一連の行為、あるいは現象のことを〈翻訳〉と呼ぶのではないのでしょうか。

◇ 9 翻訳空間について

翻訳空間というのは、翻訳している空間のことではありませんし、翻訳者のいる場所でもありません。人が翻訳を行うとき、貴店言語と目標言語の範囲を措定し、さらにそのお互いを異化するために、ひょっとしたらあるかもしれない中間的で周辺的な言語を消去し、何もなくなってしまうことを言います。あるいは、その消去によってできた言語と言語のあいだの空白、異化のための余白作用とも言えるでしょう。

この余白がなければ、翻訳をすることができません。なぜなら、目標テキストがどこに訳出されればいいのかははっきりしないから

です。中間地帯や周辺地帯が進入禁止になっていなければ、言葉は目標に達することなく、その領域に向かってぼろぼろとこぼれ落ちていくことでしょう。漠然と〈何とか語〉から〈何とか語〉を訳するという観念を持っているだけでは、翻訳はうまくいかないのです。

何ものも入ることのできない空白を作らなければなりません。野村喜和夫さんが言うように、翻訳空間はポリフォニーともクレオールとも直接的な関係はありません。本当に実在する中間地点なのではなくて、ただ単に翻訳者の頭のなかにある真っ白なもの、ただの空白です。翻訳者によって作られた、がらんどろの何もない地帯、何も入れない場所です。これから生み出すはずの言葉は、どの場所に入ってくて、どの場所に入ってはいけないのか、それを〈間白〉が決定するのです。

その間白の作用こそが、翻訳の成功と失敗というものに、密接にかかわりあっています。

言語措定によって翻訳空間が規定されるとすれば、また翻訳空間も言語を措定します。ある措定によって生まれた空白が有効なものとして社会に認められたとき、そのあとにつづく人は、あらかじめしなければならぬ自らの措定行為を意識せず、ただその空白だけを模倣して繰り返すことが、しばしばあります。その空白によって言語措定が自動的に決まり、またそれが社会的に有効だとされているのだから、翻訳者はさほど意識せず無批判に適用すればいいというわけです。

しかしその空白が何度も使われたために伝統として固化してしまうと、ある時代に生きる人間の現実や意図と折り合わなくなることがあります。最初、その言語を措定したときには、その出口側にちゃんと人がいたにもかかわらず、繰り返していくうちにその出口に人がいなくなり、ただ漫然とその空白を繰り返すだけになってしまうという事態もありうるのです。その場合、目標言語にはすでに人が結び付けられていないにもかかわらず、その事実気づかぬまま訳せたという幻想だけを持ってしまいます。日本の例でいくと、〈漢文〉という翻訳法における荻生徂徠や吉川幸次郎の言説を参照するとよいでしょう。あるいは学術における〈逐語訳〉という翻訳空間でもかまいません。伝統化してしまった空白は、翻訳者にとって威圧的に働くでしょうし、何か強制されるものとして存在することもあるかもしれません。

そうでなくとも、常に翻訳者は政治的な翻訳空間の抑圧を受けているといえるでしょう。国家という枠によって定められた統一

言語であるとか、公用語であるとか、標準語であるとか、国家内に〈共通〉として推奨されているものがある限り、そういった定義によって言語措定も翻訳空間も政治的な影響を受けているのです。

翻訳空間には、大きく分けて、ふたつの傾向があると思います。環境に起因するものと、意識的に操るものです。

環境の差をもととして生じる翻訳空間は、ある人間や文化と、もうひとつの人間や文化が、どれだけ接触なり交流なりして、どれだけ親密さを持っているか、ということにかかわってきます。まったく違う現実と接している人間や文化同士では、やはりお互いにその現実を自分のなかで再生することがむずかしく、理解がむずかしいければ、同時に翻訳もまたむずかしいということになります。あるいは、お互いの言葉の差というものも、環境的要因のひとつになるでしょう。膠着語と孤立語の差であるとか、表現構造などの差などですが、これらは世界をどのように表現するか、その世界と人間との関係のつけ方が違っているということなので、文化などと同じく、それゆえにお互いの現実を自分たちのなかでよみがえられるのが困難になるということでしょう。もし比喩的に考えていいならば、この関係は翻訳空間の〈遠近〉としてとらえられるかもしれません。

一方、意識的な翻訳空間の場合は、翻訳者本人が、対象を自分と異なるものであるのか、それとも似ているものであるのか、どう考えているのか、という自覚に大きくかかわってきます。実際に交流のない未知の人々と接したときだけでなく、同じ文化に属していると考えられる隣人に対しても同じようにかかわってきます。それは相手を〈他者〉として見つめるのか、〈自分と似たような者〉として見つめるのか、ということです。自分に近いと思える者、同一化してしまった者、環境や地位や性別や経験や性格や国籍が似通っていると思える者に対して、それでも相手をあえて〈他者〉と見つめるのか、それとも自己と同一化したまま接するのか、あるいは、まったく自分から遠い者であるにもかかわらず、自己と同一化して接するのか、やはり〈他者〉として見つめるのか、〈意識的〉というのは、そういう問題です。おそらく前者の方が重要です。無意識のうちに自己と同一化させてしまっていると、本来他者であるはずのものを肝心なときに見誤ってしまうことがあります。翻訳をするときは、たとえ同一視できるようなものでも、〈あえて切り離せる〉かどうか、あえて翻訳空間が作れるかどうか、ということが大切になるのではないのでしょうか。こちらもし比喩的に考えていいならば、この関係は翻訳空間の〈硬軟〉をとらえられると思います。

この〈遠近〉と〈硬軟〉ふたつの要素によって作られる異化の程度を、翻訳空間の〈強度〉と呼ぶことにします。翻訳空間は、翻訳者の措定したふたつの言語、あるいは対象とするふたつの現実や世界、ふたつの人生や人間が異なると考えれば考えるほど、翻訳空間の強度が強くなります。しかし反対に感覚が薄ければ薄いほど、強度は低くなります。後者の低くなっている状態というのは、人間が普段の生活を送るなかで、何気なく会話としたり、何気なく相手のことをわかると思っていたりする状態に近いと言えるでしょう。

翻訳にとって〈翻訳空間の強度〉は、本当に大問題です。なぜなら、翻訳空間が強ければ強いほど、相手はまったく他者へと近づいていき、根本的には理解できない人間へと向かっていくからです。究極的には、お互いの人間の言語と文化がまったく異なっていて、思想だけでなく相手そのものがまったくわからない存在として現れてくるのです。そのあいだでの翻訳は無理であるにせよ、相当部分が離れている他者と接した場合は、生活をともにしながら、自らの全身や全人生を使って、相手と共通の部分でゼロから作り、相手を推量し解釈していくしかありません。高い翻訳空間というのは、自分の身体や人生を使って相手を推し量っていくということが必要であるため、高い身体性とエネルギーを必要とします。多くのエネルギーが求められるということは、かなりの負担となるでしょうから、翻訳を続けたり、終わらせたりすることに関しても、大きな影響を与えてくることは間違いありません。もしその翻訳空間を乗り越えることができれば、自分の思うところに目標テキストを生成することもできるでしょうが、必要なエネルギーが多いということは精密な制御が難しくなり、翻訳の誤差が大きくなるということでもあります。言語措定や表現体の制御が細かければ細かいほどまたさらなるエネルギーが必要だからです。

逆に翻訳空間が弱いとなると、もちろん必要とする身体性やエネルギーは低く少なくなってきました。しかし、そうすると理解がある枠組みを機械的に反復するような形になったり、画一的な解釈を押し付けたりすることになってくるので、細かな差異や意図などに反応できなくなります。けれども、ある人間や文化のなかであらかじめ類似性がある、いくぶんかの同一性が保証されているような状態であるなら、それで事足ります。ほとんどの日常生活はこのレベルで行われることでしょう。あまりお互いが他者であることを強く意識することなく、実に低い翻訳空間でもって会話したり接触したりします。〈同じ言葉をしゃべるんだから私の言葉はわかるはずだ〉

というのは、本当は幻想にすぎませんが、いったんその疑いを保留して、とりあえずお互いがわかるかのように交流するわけです。もちろん、これは意識してどこかへ誰かへ向けて表現するわけではありませんから、よくちょこっとずれたりします。どんどん弱まっていくと、相手が〈自分のことがわかる〉と思い込んで言葉を向けていくようになるわけですが、相手を気にしない物言いはさらに相手からずれていき、相手側がそのずれたものを解釈するために、自分から補正をかけていかなければならなくなります。弱い翻訳空間は、その目標側に解釈のための大きなエネルギーや身体性を要求するようになるのです。弱ければ弱いほど他者が消えていってコミュニケーションに不適な状態になっていくわけですが、同時に相手に対してその行為なり言語なりが〈異〉のものであるという衝撃を与えるようになっていきます。

これら翻訳空間の状態は、あるときには翻訳者にとって戦略的なものであり、あるときには固化しているがために強制されることもあります。本質的にどの翻訳空間がよく、どの翻訳空間が悪いということはありません。人間に、毎日高いエネルギーを要求し、周りすべての人間を他者として見つめ続けさせるのは、あまりにも酷ですし、そんなことをしては人間生きていけません。けれども、弱すぎる翻訳空間は、うまく意思疎通がとれ生活できる限りではよいのですが、たまに支障をきたしたとき、大きな問題を出来させることがあることも事実です。

翻訳空間の問題は、そのときの事情や状況にいつも照らして見なければなりません。

◇10 直訳と意識を脱構築！

いつもみんなの話題になっていろいろと論争になったりする〈直訳〉と〈意識〉ですが、正直なところこれほど曖昧でテキトーでうさんくさい分類はありません。はっきりいってかなりめちゃくちゃです。まず批評用語としてはほとんどまったく機能できないほどひどいですし、それぞれの人でいろんな意味を勝手に作りすぎです。

単に〈直訳〉といっても、辞書を見れば「外国語をその原文の字句や語法に忠実に翻訳すること」と書いてあり、〈意識〉は「原文の一語一語にこだわらず、全体の意味に重点をおいて訳すこと。また、その訳したもの」と書いてあります。でも、〈意識〉の意味で

（つまり意味に忠実にということ）〈直訳〉という言葉を使っている人もいますし、やりすぎの訳という意味で〈意識〉を使う人もいます。もちろんやりすぎない訳という意味で〈直訳〉を使う人もいれば、もっとひどく〈辞書を引いただけ〉という意味で〈直訳〉という言葉を使う人もいます。

とにかくこんなに意味がごちゃごちゃしては、わけがわかりません。といいますか、こういうずれが温存されたまま論争になったりすると、これはもう悲劇なのです。ある意味、喜劇なんですけれど。

つまり、たとえば〈意味に忠実〉という〈直訳派〉の人と、〈意味を訳す〉という〈意識派〉の人が、言っていることとか考えてることはまったく一緒なのにもかかわらず、その〈直訳〉〈意識〉という字句のうわつつらだけにこだわって対立してしまうことがあるのです。古今東西の翻訳論にそんな例はいくらでもあるわけです。それでもって、いつも〈どっちかに正しいものがあるはずだ〉なんて思って議論するので、お互いのけなしあいであったり、自己の正当化に終始したりで、なんとも醜くて仕方がありません。

そういうむちゃくちゃな現状に気づいて、どうにかしようか、と考えた人も世の中にはいるわけで、それが中国の翻訳家で言語学者の林語堂さんです。林さんがそんな荒れ放題の〈直訳・意識〉の不毛な二元論の対立をどのようにしたかと言いますと、とりあえずお互いにダメだダメだと言いつつ合っている〈直訳〉と〈意識〉はどっちもいいことにして、それぞれのそのダメなところを別の言葉で定義しちゃおう、ということにしたわけです。それぞれを両極端に押し進めて、その両極端をダメなものとして抽出すれば、ちゃんと批評的に語れるようになるんじゃないですか、そうでもしないと、本当はダメなものが大丈夫な分類のなかに居直って、見つけれなくなりますよ、と。

そうやって決めたのが、〈死訳〉〈直訳〉〈意識〉〈胡訳〉のよつです。〈死訳〉は〈直訳〉のやりすぎで、〈胡訳〉は〈意識〉のやりすぎというわけです。

でも、やっぱりなんだか胡散臭さは抜けないわけです。というよりもむしろ、そもそも直訳と意識って何？

一般的には、〈Good morning, how are you?〉を〈おはようございます、お元気ですか？〉と訳せば〈意識〉で、〈いい朝、あなたはどうですか？〉と訳せば〈直訳〉ということになります。でも、それって本当？

たとえば、辞書で〈Good morning〉と〈how〉を引いて、そこにある訳文を書き写して〈おはようございます、お元気ですか？〉と書きます。

sonでもって、〈good〉〈morning〉〈how〉〈are〉〈you〉とひとつひとつ引いて、書き写して〈いい朝、あなたはどうですか？〉と書きます。

もし翻訳者だけを見るのであれば、この行為に何の差があるのでしょうか？ おそらくどちらも読み手のことなんかこれっぽっちも考えずに辞書を引いて、ただ書き写して、それで翻訳終わり。こういう結果の元に生まれた〈おはようございます、お元気ですか？〉は本当に〈意識〉なののでしょうか？ それに、〈直訳〉の方だってそれは本当に〈直訳〉？ もしそれが「外国語の語法に忠実に」訳すのだったら、日本語に独特の〈は〉なんていう〈辞〉は入れちゃいけないはずです。〈いい 朝 どう ある あなた〉でなくてはならないはずです。少なくとも。

たぶんこのあたりの言説の胡散臭さは、どうしても基準を〈言葉〉に置くからだと思います。より正確に言うと、〈言葉の表面〉ばかり見ているからです。前のところで述べたように、まず〈意味〉というのは決して空気中を飛ばなくて、自分の頭のなかだけにしかありません。そして、〈理解〉するというのは、意味を作ろうとした瞬間の身振りを自分のなかで繰り返すことだとするならば、この今ここに例としてあげた〈直訳〉と〈意識〉は、どちらもその身振りを繰り返そうとしていません。どちらも辞書を引いただけです。

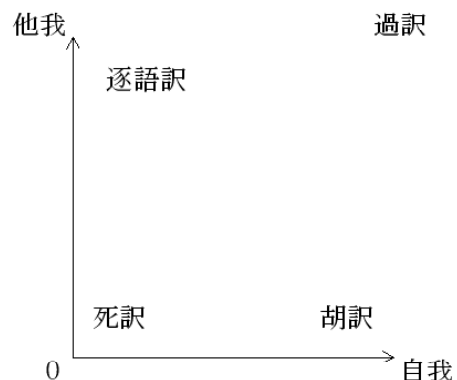
というわけで、これまでの〈意識〉〈直訳〉あるいは〈死訳〉〈胡訳〉も混ぜてもいいですが、これらをいったん崩して、その身振り中心の考え方で再構築してみましょう。

そういう枠組みに当てはめたとき、役に立つのはさきほどの〈死訳〉〈胡訳〉です。まず〈死訳〉というのは、その誰かの作った痕跡を自分のなかでとらえて、じゅんぶんに身体化しなかったこと、ちゃんと再生しなかったこと、というふうに定義づけます。逆に〈胡訳〉はそのやりすぎ、身体化が過剰であったり、方向性を間違ったりした、というふうに定義づけられます。

でも、ここで一回立ち止まってみる必要があります。〈死訳〉はそのままでいいのですが、〈胡訳〉の〈やりすぎ〉の面というのは、かなりいろんな面があるんじゃないかと思います。つまり〈意識〉と言って普通非難される場合、〈原文がよくわからなくて自分の言葉でごまかした〉ときと、〈原文がよくわかりすぎて意味を増幅さ

せちゃった（裏の意味まで書きちゃった）というふたつのパターンがあります。そうするとこのあたりを〈胡訳〉という言葉ひとつに任せるのは結構危険なことになります。

そこで、〈原文の意味で読みすぎる〉方向性と、〈自分の意味で読みすぎる〉方向性のふたつに分けて、それをひとまず〈他我を推測しようとする自己〉と〈自我を表出しようとする自己〉の二軸として、以下のような図を作ってみました。



さきほどの〈裏の意味まで書きちゃった〉というのが右上の〈過訳〉で、〈自分の言葉でごまかした〉が〈胡訳〉。〈死訳〉と〈逐語訳〉の違いは、辞書を引くときに、ちゃんと意味を推測しながら引いているかどうか、という点です。〈死訳〉はただ引いてそれぞれの言葉をくっつけるだけで、内容への吟味や考察はこれっぽっちもない状態です。

それと比べて、〈逐語訳〉はここは文脈的にこの字義になるだろう、という推測をしているのですが、それでも辞書引きから外へ出ることはなく、そこに自己を参与させて身体化させることはあまりないというような状態を想像してください。

この図が何か絶対的な正しさをあらわすことは決してありませんし、この図自体正しいかどうか怪しいものですが、〈直訳〉〈意識〉の二元論よりは批評的に使いやすい枠組みなのではないかな、と思います。

◇11 いろんなテキストと翻訳者の位置関係

ここまで記してきた翻訳の構造というのは、翻訳者にかなり自由というか幅を許すものになっています。それゆえに、翻訳者それぞれは本当にさまざまなやり方や態度や方針をとることができるわけです。現実にもいろんな翻訳哲学や翻訳観をお持ちの方がいるわけですから、どれかひとつの翻訳態度が正しいんだ、というふうにな

るよりも、仕事の内容とか性質とか、あるいは立場とかジャンルとか、社会的な状況とか、そういったものを俯瞰できるようなものであった方がいいわけです。

そういうわけで、とりあえずさまざまな立場を羅列してみます。

- (1) 逐語－起点言語型
 - ・起点テキストをあげ、翻訳空間が弱く、目標言語の措定が甘い。逐語訳。
- (2) 逐語－措定不全型
 - ・ただ辞書を引くだけ。外国語学習者か翻訳の下手な人間。
- (3) 等価－支配型
 - ・起点テキストの意味の権威化。植民地主義的翻訳論。
- (4) 起点テキスト－目標テキスト型
 - ・イメージ翻訳。読みを移す。大久保康雄など。
- (5) 著者想定－目標言語型
 - ・著者が××人ならどう書くか。
- (6) 著者想定－代筆型
 - ・著者が××語を書くことができたならどうするか。
- (7) 著者想定－没入型
 - ・著者と私をびたりと合わせる。寄り添う。自己を捨象する。
- (8) 翻訳空間－中間地点型
 - ・翻訳途中のメモ。翻訳者特有の中間言語。休憩場所。
- (9) 題材－目標言語型（起点テキスト－自己仮託型）
 - ・翻案。自分のものにすること。テキストとのセックス。
- (10) 表現体一致型
 - ・ビジネス文書。法律文書、契約文書、説明書。
- (11) 辞書型
 - ・単語をパラフレーズする。意味を分類する。コアイメージ。
- (12) 機械翻訳型
 - ・言語措定はゆるい。痕跡を痕跡で訳す。

たぶんもっとあると思うのですが、とりあえずこれにて。

◇12 翻訳Q & A：誤解だらけの翻訳

Q 1：バイリンガルの人が翻訳が下手だっていうのは本当ですか？

A 1：本当です。一概には言えませんが、バイリンガルの人の中ではなく、ふたつの言語がどちらとも自らの主体としての〈言語〉であるため、どちらか一方だけを客体（他者）として切り離し、そのあいだに〈翻訳空間〉を作り出すのは結構な意識と努力が必要だと思います。自分のなかで〈近い〉と思ってしまう〈言語〉同士ほどそういうことがよく起こります。地方出身者のなかでの標準語と地方語の関係であるとか、あるいは日本語と朝鮮語の関係であるとか、あるいは印欧語族同士とか、一般にそういう関係のあいだでは、〈あえて〉翻訳空間を意識しなければ、結構思わぬところで翻訳が失敗します。

Q 2：うまい翻訳は外国語ができないとできないと言う人がいますが、本当ですか？

A 2：大嘘です。簡単なアナロジーを考えてみてください。翻訳において外国語ができるというのは、音楽において楽譜が読めるということとほとんど変わりありません。楽譜が読めればすぐ演奏ができるわけでもありません。同時に、楽譜が読めなくても絶対音感や相対音感でもって耳コピすれば、そこから上手な演奏も可能であるように、翻訳でも誰かの訳した逐語訳や翻訳を読んで、そこから上手な翻訳を作り上げるということは可能です。もし質問のような定理を認めるとすれば、おそらくすべての再話や翻案は正当に評価できなくなり、せっかく佐藤宗子さんが再話を再評価しようとしてやってきた努力が全部水の泡になってしまうので、翻訳研究者としては絶対に認められません。

Q 3：じゃあ、青山南さんが「外国語ができないから翻訳ができる」って冗談で言ってるんですけど、あれは本当ですか？

A 3：本当です！ ここで重要なのは、本当に外国語ができるかできないか、ではなくて、その人が「私、外国語ができないんですよ」と発言していて、ゆえに〈外国語ができないという意識〉を持っているという点です。それは外国語をまったく他者として見つめることができている、ということですから、

その人の〈翻訳空間〉は相当強いはずですよ。柴田元幸さんや福原麟太郎さんとかは〈外国語ができない〉と本人はおっしゃるけど、実のところめっちゃくちゃ英語ができてめっちゃくちゃ翻訳がうまいですよ。

Q 4：ということは、英語ができるって思ってる人は翻訳ができない？

A 4：そういうこと。俺って英語得意じゃん、って思ってるようなやつには、翻訳空間がうまく作れないので翻訳はできません。他にも「この作品を俺はわかってる」とかも怪しいですよ。つまり別に得意でもわかっててもいいのですが、翻訳をするにはまず〈わからない振り〉をすることが大切です。〈わからない人〉を想定して翻訳をはじめるわけなので、その対象を自分のなかで作りに出せなければ、つまり〈わからない自分〉を装うことのできない人は、そもそも翻訳者に向いてないような気がします。

Q 5：よく「あなたの英語力を生かして翻訳を！」みたいなフレーズがありますが、あれはいいんですか？

A 5：ダメです。ものすごいダメです。ああいう嘘はやめてほしいです。「楽譜読める人はそれを生かして音楽をやきましょう！」とか言われたら、音楽家の人はどう思いますか？ 翻訳の雑誌って、最近は英語学習誌か、翻訳家になりたい人向けのビジネス誌になっちゃってますよね。かの伝説の翻訳業界雑誌『翻訳の世界』がついに終わって英語学習誌に変わったとき、当時の編集の人が「なんかもう日本の翻訳業界は終わった」的なことを嘆いていましたが、たぶんある意味その通りなんだと思います。

Q 6：野上豊一郎って直訳主義者ですよ？

A 6：断じて違います。ものすごい誤解です。彼は直訳主義者というよりは、能の表現論から派生した翻訳表現主義者です。彼のなした翻訳と、彼の翻訳論、そして彼の能のエッセイをちゃんと読むと、それが偏見から生まれた誤読だということがわかります。私の論文あげるから読んでください。

Q 7：機械翻訳ができるようになったら翻訳家は職を失いますか？

A 7 : うーんどうなのでしょう。チョムスキー御大がもてはやされていた時期はそんな幻想もあったみたいですが、今は機械翻訳は完全な翻訳ができないからやっぱり機械は馬鹿なんだ、みたいな風潮がありますよね。でも。うちの大学の元総長の長尾真さまによると「機械によって完全な翻訳はできない。がしかし、機械を使えば工学的で効率のよい翻訳はできるので、そのあたりからがんばろう」ということですので、翻訳家にとってかなり役に立つものという感じで開発されていくんじゃないかな、と思います。佐藤理史さんの〈境界認定〉とかかなり工学的でかっこいい翻訳ですよ。

Q 8 : 翻訳と親和性のある言語理論ってなんなのでしょう？

A 8 : そうですね、とりあえず生成文法とか格文法とか構造言語学とかが合わない（本質を暴きえない）っていうことは、機械翻訳のみなさんの努力によって判明していますし、ジョージ・スタイナーさんも批判しているので、まず除外していいと思います。私は、元の論文でやったみたいに、メルロ＝ポンティとジャック・デリダと時枝誠記と三浦つとむあたりを使えば、結構いい線いけるんじゃないかと考えているんですけどね。

Q 9 : あー、この翻訳、誤訳がある！ 翻訳者ってバカだな！

A 9 : バカじゃありません。誤訳のひとつふたつは、中野好夫さんに言わせれば「暈の埃」であって、堀口大學さんに言わせれば「薔薇の棘、西瓜の実」なのです。単なるケアレスミスで、別にあなたがそれをひとつ見つけたからといって、あなたが常に正しくあなたの方が頭がいい、なんていうことにはなりません。誤訳指摘というと、鈴木主税さんが言うようにみなさんどうしても「正義は我にあり」みたいな感じになっちゃいますが、それは意味を権威づけ、意味しか見ていません。かつての別宮貞徳さんの誤訳指摘が有意義だったのは、意味じゃなく、その裏にある社会的問題を暴いたからです。批評意識の欠落した誤訳指摘は、決して本質にはなりません。

Q 9 : 翻訳研究ってやる意味あるんですか？ 読者のために書くとか、テキストに言語を割り当てるとかって、当たり前のことじゃないですか。研究する意味あるの？

A 9 : 君は今、すべての基礎科学を敵に回しましたよ。じゃあ、こう考えてみましょう。「木からリンゴが落ちるなんて当たり前のことじゃないですか。物理の研究ってやる意味あるんですか？」そんなことを言い始めたらニュートンでさえも無意味になってしまうのです。もしリンゴの場合もそう思うのなら私は何も言いませんが、あなたが翻訳だけにそういう物言いをするなら、なんだか世間における翻訳の地位の低さを感じてしまって私はものすごく悲しくなります。

Q 9 : 日本の翻訳研究ってどうなんですか？

A 9 : 学会もジャーナルも学部ありません。海外の翻訳研究ジャーナルもろくに国内所蔵がありません。そんな状況です。一度、職業大学院ができかけたことがあったのですが（2005年）、ぼしゃりました。悲惨な状況をもっとしゃべってもいいですけど悲しいのでやめます。日本通訳学会に翻訳研究分科会があるにはあります。でも通訳の人がよくおっしゃるように、通訳と翻訳は全然違う行為なので、そのへんを注意する必要があります。

Q 10 : なんで日本では翻訳研究がはやってないんですか？

A 10 : なんででしょうね。「くだらないから」と一刀両断する人もいますが、たぶん1960年代から70年代の翻訳研究は、日本の研究者にとって本当に〈くだらない〉ものだったのだと思います。当時の生成文法的アプローチやコミュニケーション図式なんかを見ていると、翻訳者の主体性は奪われていて、翻訳者は意味の奴隷みたいな感じで、ただ意味をうやうやしく運ばいいみたいな感じでした。そりゃ許せんですよ。最近の研究に対しても、柴田元幸さんや野崎歓さんや和田忠彦さんは翻訳者の主体性とか翻訳者とテキストの関係とかがごっそり抜け落ちてるとか指摘されています。

Q 11 : もうちょっと翻訳研究をなじみやすくしてください。

A 11 : じゃあ略称を作りましょう。Translation Studies ですから、〈とらすた〉ではいかがでしょうか。四文字なので言いやすいですよ。もっと媚びた感じで〈とらすた。〉とか〈とらすた！〉とか〈とら☆すた〉とかでもいいです。

◇本当の論文の目次

「1. 翻訳者の現象学／1.1翻訳者という〈身体〉／1.2個人と言語の体系／1.3集団と言語の体系／1.4翻訳という現象／1.5翻訳を語るために／1.6翻訳者の位置／1.7まとめ

2. 翻訳研究各論——批評およびその他素描／2.1吉川幸次郎と翻訳空間／2.2原民喜とガリヴァー旅行記／2.3柴田元幸と開かれた日本語／2.4別宮貞徳と消費者運動／2.5野上豊一郎『翻訳論』の誤読／2.6出版と翻訳空間

3. 実践としての翻訳／3.1インターネットと翻訳空間／3.2 Conan Doyle, Study in Scarlet／3.3 Franz Kafka, "In der Strafkolonie"／3.4 Lyman Frank Baum, "A Kidnapped Santa Claus"／3.5 Karel Capek, R.U.R.／3.6著作権失効の翻訳文献」

各論の方をお読みになりたい方は、著者までご連絡ください。

◇宣伝

青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) にて、Antoine de Saint-Exupery "Le Petit Prince" (星の王子さま) の新訳『あのと時の王子くん』(大久保ゆう訳) が1943年の初版に付された挿絵つきで、好評公開中です。初版挿絵での出版は国内でもたった一冊しかありませんが、青空文庫では訳文・挿絵ともに無償で公開しております。どうぞ一読ください。

<http://www.aozora.gr.jp/cards/001265/card46817.html>

次のページからその一部を抜粋します。

◇『あのと時の王子くん』

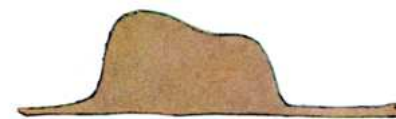
1

ぼくが6つのとき、よんだ本にすばらしい絵があった。『ぜんぶほんとはなし』という名まえの、しぜんのままの森について書かれた本で、そこに、ボアという大きなヘビがケモノをまるのみしようとするところがえがかれていたんだ。だいたいこういう絵だった。



「ボアというヘビは、えものをかまずにまるのみします。そのあとはじっとおやすみして、6か月かけて、おなかのなかでとかします。」と本には書かれていた。

そこでぼくは、ジャングルではこんなこともおこるんじゃないか、とわくわくして、いろいろかんがえてみた。それから色えんぴつで、じぶんりの絵をはじめてかいてやった。さくひんばんごう1。それはこんなかんじ。



[……]

2

それまで、ぼくはずっとひとりぼっちだった。だれともうちとけられないまま、6年まえ、ちょっとおかしくなって、サハラさばくに下りた。ぼくのエンジンのなかで、なにかがこわれていた。ぼく

には、みてるひとも、おきゃくさんもいなかったから、なおすのはむずかしいけど、ぜんぶひとりでなんとかやってみることにした。それでぼくのいのちがきまってしまう。のみ水は、たった7日ぶんしかなかった。

1日めの夜、ぼくはすなの上でねむった。ひとのすむところは、はるかかなただった。海のどまんなか、いかだでさまよっているひとよりも、もっとひとりぼっち。だから、ぼくがびっくりしたのも、みんなわかってくれるとおもう。じつは、あさ日がのぼるころ、ぼくは、ふしぎなかわいいこえでおこされたんだ。

「ごめんください……ヒツジの絵をかいて！」

「えっ？」

「ぼくにヒツジの絵をかいて……」

かみなりにうたれたみたいに、ぼくはとびおきた。目をごしごしこすって、ぱっちりあけた。すると、へんてこりんなおとこの子がひとり、おもいつめたようすで、ぼくのことをじっと見ていた。



◇クリエイティブコモンズ



表示 - 非営利 - 改変禁止 2.1 日本

あなたは以下の条件に従う場合に限り、自由に

*本作品を複製、頒布、展示、実演することができます。

あなたの従うべき条件は以下の通りです。

*あなたは原作者のクレジットを表示しなければなりません。

*あなたはこの作品を営利目的で利用してはなりません。

*あなたはこの作品を改変、変形または加工してはなりません。

<http://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/2.1/jp/>

※つまり、コピーはOKですよ！ってことです。

◇奥付

2007年5月31日発行

2007年7月3日修正発行

発行：The Baker Street Bakery

◇名刺

大久保友博／大久保ゆう（筆名）

京都大学人間・環境学研究科 修士課程二回

翻訳家

京都大学電子テキスト研究会主宰

メールアドレス：holmes@alz.jp

ホームページ：<http://www.alz.jp/221b/>